

ニッポン ドクター和の 臨終凶巻



長尾和宏（ながお・か東大阪大
ずひろ）医学博士。東大第二
京医大卒業後、大阪大第二
二内科入局。1995年、兵庫
庫県尼崎市で「人をは診
ックを開業。外来診療か
ら在宅医療まで「人を診
る」総合診療を目指す。」
近著「薬のやめどき」は「
痛くない死に方」は「い
ずれもベストセラー。
関西国際大学客員教授。

せん。例えば、私が今死んだら、人はどう思うでしょうか。『まだ34歳の若さで、可哀想に』『小さな子供を残して、可哀想に』でしょうか？ 私は、そんなふうに思われたくありません。なぜなら、病気になることが私の人生を代表する出来事ではないからです』（昨年11月、英BBCに寄せた手記より）。

せることに重点を置く緩和ケアへの移行ができずに病院で最期を迎えています。しかし、ご夫婦のブログを拝読するかぎり、麻央さんは入院医療から在宅医療に自然な形で切り替えています。人生最期の1カ月の過ごし方が大切。在宅医や訪問看護師による緩和ケアを受けたからこそ、死の2日前までブログを更新し、ジュースを飲み、家族と会話ができていた。

今週はこの人を書かずにはおられません。歌舞伎役者、市川海老蔵の妻で、フリーアナウンサーの小林麻央さんの死から1週間がたちました。

こつした評論は結果的に世の医療不信を増幅し、何よりも麻央さんを「運が悪かった人」「かわいそうな人」に貶（おとし）めるだけではないか。

最期の瞬間は、夫の帰りを待って「愛している」と…。もし病院でたぐさんの点滴を受けて鎮静をかけられていたら、最期の言葉を残すこともかなわなかったはずですよ。

一部メディアは、最初の段階で麻央さんの乳がんを見逃した医者「犯人捜し」をしているようですが、そんなことをして誰のためになるのでしょうか。医療はいつも不確実性の上になり立っています。どんなに優秀な医者でもすべてが早期に発見することは不可能です。また、もっと早くに発見できていたら治せたかもと

生前、麻央さん自身はこう言っていたのではないですか。「人の死は、病気であるかにかかわらず、いつ訪れるかわかりません。例えは、私が今死んだら、人はどう思うでしょうか。『まだ34歳の若さで、可哀想に』『小さな子供を残して、可哀想に』でしょうか？ 私は、そんなふうに思われたくありません。なぜなら、病気になることが私の人生を代表する出来事ではないからです』（昨年11月、英BBCに寄せた手記より）。

麻央さんの最期は、私がずっと言い続けている在宅での「平穏死」であり、「自宅が世界最高の特別室」であることの証明です。亡くなった翌朝も、お子さんたちはママの足をさすり、同じ部屋で寝たとか。これも病院ではなかなかなかったはずですよ。

12 小林麻央

療はいつも不確実性の上になり立っています。どんなに優秀な医者でもすべてが早期に発見することは不可能です。また、もっと早くに発見できていたら治せたかもと



何とかがして治そうと、がんの治療を続けようとしています。キユア（治療）からケア（積極的な治療ではなく、自宅で痛みや苦しみを取り除き穏やかな日々を過ごす）。

自分の最期を覚悟していたのか。旅立つ姿を子供に見せたことは母親として最後の教育で最高の贈り物でした。2人のお子さんは、きつと立派な大人になるでしょう。

「愛してる」残せた平穏死

自分の最期を覚悟していたのか。旅立つ姿を子供に見せたことは母親として最後の教育で最高の贈り物でした。2人のお子さんは、きつと立派な大人になるでしょう。